

巻頭言

道元の『宝慶記』という小さな書物の中に、ひとつの朗話が載っている。禅の奥義を窮めようと宋に渡った道元は、阿育王山という寺のある典座（炊事係）と出会う。その典座は齢六十一歳、数十年來炊事係を担当しているという。道元はそれを聞き、貴重な時間を飯炊きに費やし続けていいものだろうか、修行をした方が良くはないかと尋ねる。するとその典座は、「あなたは弁道を了得していない」と哄笑し去って行った、という話である。道元は後に悟りを開いてから、この炊事係の哄笑の意味を深く理解することになる。道元は、「行において証する」、山川草木悉皆成仏を只管打座の行において証明することで悟りを得た。座禅を専らにするといっても、一日中座禅を組む訳にはいかない。であれば、行横坐臥、寝たり起きたり食事をしたり掃除をしたり、日常のあらゆる行動が座禅と同じ意味を持つのである。自分の仕事を一生懸命に尽くすことが座禅同様、悟りに至る道であり、そうすることによって山川草木、世界のあらゆるものの成仏が現成する（世界は既に成仏が完成しているのではなく、一人一人が参与して成仏させていくものである）。そう悟った道元は、老典座が哄笑した意味を了解した。典座にとっては炊事が座禅なのであって、飯を炊くことで仏を現成していたのだ、と。私はこれを読んだ時、敬愛する哲学者スピノザがレンズ磨き職人であったり、ウィトゲンシュタインが庭師であったりしたことを想起し、彼らの澄明な世界観を垣間見た気がした。

道元の思想は、日常生活において目前のものに追い立てられて忙しさを嘆いている私たちの胸に清冽に響く。ここに書いた逸話は、これから社会の荒波に漕ぎ出していく人間文化学科第二期卒業生へ私から贈る詞である。進学・就職と進路は異なるが、在学中に得た教養と技能を活かし、二年間ここで鍛えた思考力・判断力を持って事に当たり、他人に対する深い理解と愛情を忘れることなく、自分の持ち場で人生をしっかりと歩んで欲しい。この人間文化学科特集号は、本学科教員がそのような願いを込め、卒業を祝して執筆したものである。在学生も和やかさを基調とする本学科の魅力を承け継ぎ、さらに一層高めてもらいたい。ささやかではあるが、本特集を一つの拠点として、人間文化学科教員の研究・教育活動が一層活発になることを関係者一同期している。大方の今後のご支援・ご鞭撻を願ってやまない。

（井原奉明）